

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介致します



合田 直弘

「名選手名監督にあらず」。プレーヤーとして秀でた人が、組織を統括した後進を指導するポストに就いても優れているとは限らないことを意味した言葉である。同じフィールドに立つてはいても、各々の立場で求められる素養には大きな違いがあり、それらを兼ね備えた人物などは、むしろ少なくても当然なのだ。

そんな中、2つの立場でいずれも大きな成功を収めている数少ない一人が、今回のこのコラムの主役であるフレディ・ヘッド（68歳）である。

かつての名調教師で、現在はケネイ牧場のオーナーであるアレック・ヘッド氏の長男として、1947年6月19日に生まれたのがフレディ・ヘッドだ。祖父ウィリアム・ヘッドも調教師として成功した人物で、1歳年下の妹クリケット・ヘッドもまた、凱旋門賞連覇のトレヴをはじめ数多の名馬を育ててきた名調教師という、競馬一家の出身である。

騎手としてのデビューは彼が16歳だった64年春で、50歳となった97年8月にムチを置くまでの34年間で仏国のリーディングを獲得すること6回。父の管理馬イヴァンシカで制した76年を含めて凱旋門賞制覇が4回。そのイヴァンシカをはじめ、4回の凱旋門賞制覇のうち3回は牝馬に騎乗したもので、その他、G1サンタラリ賞優勝が9回、G1仏千ギニー優勝が8回など、特に牝馬に乗つての活躍が目

立ったのがフレディ・ヘッド騎手だった。

その代表馬が、連覇を果たしたBCマイルを含めて10のG1を制したミエスクである。

フレディ・ヘッドの騎手引退は実に劇的で、ドゥヴィル競馬場で行われた準重賞のトゥルジェヴィル賞を、父が所有し妹が管理するマラトンに騎乗して勝利を収めると、直後にジョッキールームで「今は会心の騎乗だった。これをもって、自分は騎手をやめると宣言。家族にとつてすら寝耳に水だった引退発表を行って、周囲を驚かせている。

その後は、調教師に転身。馬に乗ることと、馬を調教することは、やはり異なるものであったようで、フレディ・ヘッドをして10年近くにわたつた雌伏の時を過ごすことになった。名監督にはなれなかつた名選手の一人というレッテルを、当時の彼は貼られていたのだ。だが、そういう境遇から這い上がったからこそ、現在のフレディ・ヘッドは「真のホースマン」としての評価を得ているのだ。

浮上のきつかけとなったのが、06年から08年にかけてG1モーリスドゲスト賞を3連覇したマルシャンドールだった。そのマルシャンドールでG1ジュライCやG1アハイユ賞を、ナークウスでG1ジャンクラグアルデル賞を、タムユブでG1ジャンプ賞を制した08年は、彼にとつて飛躍の年となった。

そして、調教師フレディ・ヘッドの名を、騎手フレディ・ヘッドと同じくらい大きくしてくれる馬との出会いがあったのも、同じ時期だった。05年生まれの牝馬ゴールデイコーヴァが、G1仏1000ギニー2着、G1仏オークス3着と惜敗を続けた末に、G1ロスチャイルド賞で待望のG1初制覇を果たしたのが08年8月だったのだ。ゴールデイコーヴァは、G1BCマイルを08年から10年にかけて3連覇。ブリーダーズCを、騎手と調教師という2つの立場で勝利を収めたホースマンは、フレディ・ヘッドが初めてだった。

これを含めて、ゴールデイコーヴァは生涯で14ものG1を制覇。騎手ヘッドが牝馬で名を馳せたように、調教師ヘッドの名も牝馬にとつて高みに昇ることになった。

そして今、フレディ・ヘッド厩舎の看板となっているのが、欧州古馬マイル路線の最強馬ソロウ（む5）である。初勝利を挙げるのに5戦を要するなど、管理調教師同様に本格化するまで時間がかつたソロウだったが、4歳夏を境に劇的な進化を見せ、7月29日のG1サセックスを制してG1・4連勝、昨年8月から通算8連勝をマーク。もはや伯楽の賞禄すら漂わせるフレディ・ヘッドとソロウの快進撃がどこまで続くか、今季後半の欧州競馬の大きな焦点の一つとなっている。